

結婚式の着付けにおけるエスノメソドロジー 控室空間の社会的達成

師橋 奈見

0.はじめに

今回は結婚式の着付けという場面をモチーフにして花嫁と美容師との間のやりとりをビデオカメラを用いて分析し、控室という空間で起きていること、そこでの人々の相互行為での課題達成の様子や何をもって意味ある空間としているのか(本稿であれば、どのようにして美容室と似たような位置づけをしているかなど)というプロセスに着目して見ていきたい。

0-1.エスノメソドロジーとは？

本題に入る前に、このエスノメソドロジー(ethnomethodology)について説明をしておきたい。大まかな流れを述べると次のようになるだろう。

新しい社会学のアプローチ(現象学的社会学の発展型)として H.ガーフィンケル(H.Garfinkel)によって1960年前後に生まれたのがそもそものはじまりであった。このエスノメソドロジーという言葉自体も彼の造語であり、「人々のやり方の学問(ethno: cf. ethnic:民族の/人種の、method:方法、logy:~学、学問)」を意味する。人々がどのような方法を用いて周りの世界(日常生活)を理解し、周りの人とコミュニケーションをとり、共に行動しているのかということについて研究していくものである。彼が行った有名なものとして違背実験¹(または背後期待破棄実験:breaching experienceとも言われる)がある。これは、聞かなくても分かるような言葉の意味について会話の中でしつこく問いただすことにより、その場においてどんな効果が発生するのか/しないのかを知り、ある状況で通常用いられるやり方を推論しようとするものである。

また、「人々が、日々の社会的相互行為の過程で、他の人たちの言うことやおこなうことをどのように理解しているかを研究すること。エスノメソドロジーは、人びとが互いに有意義なやりとりを続けるための手段である『普通の人々の用いる方法』を問題にしている」(Giddens 1997:12)のようにエスノメソドロジーを捉えている立場もある。

エスノメソドロジーの具体的な手法としては、H.サックス(H. Sacks)らによって始められた日々の生活の中で当たり前のように使われている会話に焦点を当て、人々がどのよう

¹ この違背実験の具体例は次のようなものである。

被験者：「自転車のタイヤがパンクしてぺちゃんこになって修理してたら遅刻した」

実験者：「タイヤがパンクしてぺちゃんこになるってどういうこと？」

被験者：「とにかく、ぺちゃんこになるんだって。何を言ってるんだよ！」

こういった実験を通して通常の対話で用いる言葉について以下のようなことが考えられるだろう。日常生活に科学的に緻密なもの(細かな言及)を持ち込むと上記の例のように秩序を乱す(=会話として成立しない)ことになる。正確な意味というのが言葉本来には無いから、自分の言いたいことや述べようとする、あるいは、相手の言うことにたいする自分の解釈といったもの、それらを(会話の)背後から支える明言されていない前提(「見えているが気付かない seen-but-noticed」)ともいうことができるだろう)を通して固定しようとして私たちはしているのである。

に場面に参与しているかを会話から導き出そうとする会話分析(conversation analysis)がある。彼らは純粋に会話による相互行為に焦点を合わせ、会話の組織、構造、構成を緻密に分析、解明していこうとする立場である。この会話分析で見つけ出された代表例と言えるのが、会話の「順番取りシステム(turn-taking system)」である(Sacks et al. 1974; 山田・好井 1991)。ここでの順番取りとは、「話す権利と義務との交換過程」(山田・好井 1991:220)ということができるだろう。会話分析が注目する場面も当初の日常の場面で生まれるものから、組織や制度といった「外在的な」影響を受ける制度的状況へと関心が向けられていく。

【表 1:「順番取りシステム(turn-taking system)」(Sacks et al. 1974; 山田・好井 1991)】

- | |
|---|
| <p>(1) 会話者は、自らの順番において最後までしゃべる権利をもつ。最後までというのは、無制限ということではなく、話し終わることが可能なところまで、を意味する。そこは、
 順番を構成する単位(文・文節・単語等)が最初に完了しうる場であり、
 順番の移行(話し手の交替)が適切となる場である。そのために「自然な移行が可能な場(transition-relevant-place:TRP)」と呼ばれる。</p> <p>(2) 話し手が交替する(順番が配分される)ためのテクニックが存在する。それは二つのグループに分かれ、
 現在話している人が次の話し手を選択するものと、
 (次に話す人が)自分で選択するものである。</p> <p>(3) 順番の移行は、(以下の〔自然な～〕という優先規則において)最初の「自然な移行が可能な場」でなされる。
 〔自然な移行が可能な場において〕
 1.(A) 現在の話し手による次の話し手の選択のテクニックが使われる場合、選択された話し手が次にしゃべる優先的な権利をもち、かつ義務づけられる。
 (B) (A)でない場合、自己選択のテクニックが許され、最初に話しはじめた者が話す権利をもつ。
 (C) (A)・(B)でない場合、現在の話し手が、義務はないが話しつつける権利を保持する。
 2.1 - (C)により次の自然な移行が可能な場で(A)～(C)が繰り返される。</p> <p>(4) 聞き手は、次の話者となりうる者である以上、相手の話をよく聞き、理解しているということを絶えず他者や他の会話者に示していかなければならない。</p> <p>(5) (順番取りシステムというのは)話者の交替における間や重なりを最小化させる。それは、今話している人が次の話者を選んだ場合でも、選ばれた次の話者は今話している人がいったん話し終わってから(=自然な移行が可能な場で)話し始める。
 自己選択は「自然な移行が可能な場」でできるだけ早くなされる。</p> <p>(6) 「割りこみ1」による話の重なりや、前に話している人の話を中断することは、「話す権利」の侵害の問題として意味を持つ。</p> <p>(7) 同様の意味において「沈黙」は「話す権利」をめぐる権力現象として重要である。</p> |
|---|

エスノメソドロロジーが扱うフィールドも社会学に留まらず、医療、教育、政治をはじめとした幅広い分野にまたがっている。例えば医療場面であれば、患者への病名の告知の場

面、診断の様子、119 番通報の場面、手術場面など様々な場面がモチーフにされているといった具合である。このエスノメソドロロジーによってどういった影響が与えられたのか？それは次のようなことだろう。「人間の相互行為の実際の組織化を研究する方法を与えたこと」(山崎・西阪 1997:)であり、また「人間と人間が用いる道具との関わり合いにも着目し、その分析法を示し」(山崎・西阪 1997:)たことでコンピュータ科学などをはじめとする技術系の研究者にも大きな影響を与えたといったものである。

以上のようなことがエスノメソドロロジーについての大まかな説明になる。こういったエスノメソドロロジーを用いて人々が何を志向しているのか、どういったテクニックがあって場面が成立していくかについて、相互行為を通して読み取っていくことが本稿における目的となる。

1.研究目的

1-1.問題関心

(洋装・和装も含めた)着付け²という場面を本稿で選んだのは、自身の成人式における着付け経験があった。美容院以外の場所でしかも、自分の知らない新たな自分を美容師とのやりとりを通して作りあげていく…。何かが違うという違和感のような気持ちを抱きながら作業が進んでいったことを覚えている。場所に対しての違和感や普段着慣れない着物に対する違和感がそれだったのだろう。

この着付け経験の後、しばらくしてエスノメソドロロジーという領域を知った。エスノメソドロロジーについての詳細は前述のとおりである。エスノメソドロロジーを学んでいく中で自身の経験を照らし合わせてみると、以下のような関心が浮かんできた。一つは、その着付けを行う人/行われる人といったさまざまな人たちのいる複雑かつ流動的な状況の中で、参加者はその状況をどう把握し、作業を進めるためにどういうことを課題とし、達成しているのかといった点である。もう一点は、普段着慣れないような服装(ドレス、着物、スーツなど)になること、そこで、どういった相互行為³が行われているかということだった。こういった関心をもとに、撮影したデータをエスノメソドロロジー的視点及び手法を用いて見ていこうと思う。

1-2.先行研究

データの分析、考察を行っていくにあたっては先行研究への言及が不可欠となる。エスノメソドロロジーについての大きな流れは 0-1 で述べているので、ここでは、具体的にどういった用いられ方、分析のなされ方がされているのかについてここでは見ていきたい。

エスノメソドロロジーを用いた分析がどういった場面でなされているかという、救急医

² 「着付け」ときくと和装のみというイメージがありがちだが、ここでは洋装も含めて行なわれているし、また、参加者達が区別することなく「着付け」という言葉を使用していたので、本稿においてもそのように用いることにする。

³ 相互行為とは、「複数の行為者の間で、相互に相手側を客体として、インプット・アウトプットを基調とする何らかのやりとりが成立する場合、それらのかかわりを総称している」(小川 1985:560)。これは直接的なものだけでなく、モノなどを通じた間接的な場合でも成立する。

療をはじめとして、動物病院、美容室、書道教室、居酒屋、陶芸教室、放送局のラジオ番組といったように私達が生活する世界のさまざまな場面がその対象とされていた。一例を挙げると、美容室における相互行為分析では、鏡を介しての「参与者たちの身体の配置」（小濱 2001:63）が特徴付けされていた。また、陶芸教室においては、手動ロクロ場面と電動ロクロ場面というように作業場面を分けて分析を行い、「指導者 指導されるもの」との複雑なやりとりを、身体的レベルや音声的レベルのコミュニケーションという区分をしていた。また、製作工程の指導、手伝いなどの作業工程の流れの中に見られるやりとりを、それぞれの場面における特有のものといった細かい解釈を加えていた。分析によって、それぞれの違いを述べてきた上で、「体験学習としては手動ロクロ場面や電動ロクロ場面で行っていることは同じ」であり、「体験学習は、陶芸教室に見られたように、指導される者が実践することで初めて意味を持つ」（小林 2001:86）と位置づけている。

また、エスノメソドロジーに影響を及ぼした社会学者の Goffman は個人の場面への関与の仕方として「主要関与」、「副次的関与」（Goffman 1963=1980:48）などを挙げ、それらを区別する能力が人々にはあるとしている（それぞれについては表 2 を参考に）。参与者個人の関与の仕方というのも場面を構成する一因となると考えられる。

【表 2：Goffman による関与の分類（Goffman 1963=1980）】

<p>関与に対する定義</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ある個人がある行為 ひとりです仕事、会話、協同の仕事など をするのに調和の取れた注意を払ったりあるいは注意を払うのを差し控えたりする能力（その中で以下のような区分がなされる） <p>主要関与</p> <ul style="list-style-type: none"> ： ある個人の注意や関心の大部分を奪うものであり、個人のはっきりとした目的も表す（社会的場面の本質的要素であるから）その場面の中で強制されたものではないにしても優先されるもの <p>副次的関与</p> <ul style="list-style-type: none"> ： 主要関与を維持しながらそれを混乱させたりすることなくそれと並行してさりげなく続けることのできる行為（どういった状態であれ）行為の基本からは離れたもの <p>（例）</p> <p>勤務時間中、仕事をしながら鼻歌を歌う、コーヒーを飲む</p> <p>仕事：勤務時間という状況の中でその状況にいる本人がしなければならないとされるもの（主要関与）</p> <p>鼻歌、コーヒー：仕事をする状態を維持しながら続けている行為（副次的関与）</p> <p>朝の身支度（パンを食べながら洋服を着替える / 歯磨きしながらテレビを見るなど）</p> <p>状況によってはどちらにもなりうる。個人の関心が着替えに向けられるのであればそれは主要関与になるし、朝食をとるといことが大事であり、着替えながら食べるのは礼儀が悪いとするような背景があるなら、着替えは副次的関与になるだろう。歯磨きに関しても同じようなことが言えるのではないか？</p> <p>（主要関与 / 副次的関与との区別と共に）</p> <p>支配的関与</p> <ul style="list-style-type: none"> ： 個人に対して義務として課されるもの、社会的場面において個人はすすんで関与せざるをえない

従属的関与

- ： 注意を支配的関与にそれほど払わなくてもいいような場合に、ある程度までしかその間だけ関わることが許される関与状況に対して少なくとも表面的な配慮を示す

上記の例（勤務時間中）で言えば、支配的関与は仕事、従属的関与は鼻歌・コーヒーということになる。だがこれが、「休憩時間」ということになると逆になるだろう。

主要関与は支配的関与であり、副次的関与は従属的関与であると言える。（しかし、不変のものとはいえない。）

ここで、先行研究をもとに再び着付けについて考えてみると、対象（着付けをされる人）着付けを行う人（またはそのサポートをする人）と必要な道具類（衣装、化粧品など）空間（美容室、その他）があれば可能になる⁴。事実、和装に関していうなら、公共施設で行われる講座のひとつであったり、個人が着付け教室を開いたり、着物専門店をはじめとした各店舗による着付けサービスといったように専用の設備は必ずしも求められてはいないようである。また、ドレスなどに関しても、ブライダル専門店やレンタルブティックが催すフェアに見られるように、和装の場合と同様のことが言えるだろう。すなわち、特定の空間に限らず、さまざまな空間で着付けが可能であるというフレキシブルな一面を持っているといえる。

こういったことから、より本質的に人間の相互行為に依拠したものとして「場面」を研究、考察していきたい。本稿ではホテルの一室を控室としてなされた着付け場面を題材として研究する。そこでは、その場の参与者たちが、どのようにして相互行為の中である空間（ここでは控室）での行為を適したものとして組織し、空間の意味づけをしていこうとしているのかに関心を向け、明らかにしていこうとしたものである。

2.調査概要

T県T市にある美容院「H」（ここでは店舗名、人名などは全て仮名表記にする）にご協力をいただき、5月に行われた結婚式をビデオカメラで撮影した。結婚式の舞台となったのはT市にあるホテル「K」である。

調査に関しては、準備場面も含めた挙式の流れ全体を追うということで約7時間、実質的な撮影は約4時間程度⁵である。

当日には撮影に対しての同意書を頂いた。また、その他、当日に映った方に対しては口頭でその場で事情を説明、また同意書を多めに持参、必要に応じてサインなどを頂いた。

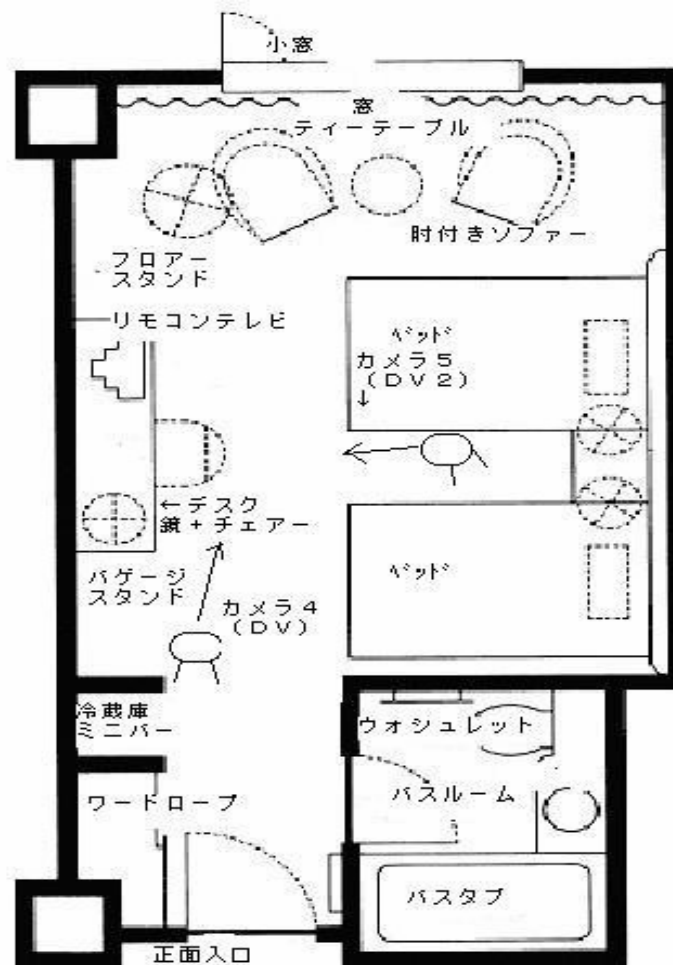
控室となったホテルの一室の見取図⁶及びタイムスケジュールは次の通りである。

⁴インタビューの際にも聞いたことであつたし、また調査の中でもそういった要素となるものが垣間見えた。

⁵実際は、全てを撮影したわけではなく、午前8時半ごろから撮影を開始、その後11時前までおよび、式のために一旦停止した。お色直し（披露宴直前のものも含めて）が3回あったために細切れに撮影は行われた。結局、終わったのは午後3時過ぎであった。

⁶広さは28㎡。2室用意されていて、片方は親族等の控室、もう片方で主に着付けなどを行う部屋にしていたようだ。この部屋の実際の配置については、

2003.05.31.
控室となったホテルの
ツインルームの見取図



【図1：調査当日、控室となったホテルの部屋の見取図⁷（2003.05.31）】

<5月31日の動き>

AM

8:00 頃

- ・ホテル K に到着
- ・着付け作業をする控室への移動（8F）撮影準備、当日の日程などの確認

8:30 頃

- ・撮影開始（ビデオカメラ2台、テープレコーダー1台）
- ・花嫁の着付け作業（メイクアップ ウェディングドレスという順番）
- ・親族の着付けなども行われる。（花嫁の着付け作業に挟み込むような形で）
- ・同時進行でホテル側の打ち合わせ、当日の様子を撮影するカメラマン（2名）お祝いの挨拶などを兼ねて花嫁の部屋を訪れる人々も出入りを

<http://www.hotelclement.co.jp/index2.html> を参考にしている。

⁷ビデオカメラの配置などについて。最初は固定したものが一台と手動一台という流れで撮影しようとしていたが、実際に撮影をしていて人の入れ替わりの多さや部屋全体の広さもあり、両方を手動に切り替えたり、最初のように固定と手動にしたり、その場に応じて変えていた。しかし基本的な配置は図1のとおりになる。

- する。あわただしい中で作業が進められた。
- 10:45 頃
- ・着付けも終わり親族の方々は別の部屋（写真撮影の行われる 5F）へ移動。
 - ・記念撮影が行われた後、11:30 頃からチャペルでの挙式（6F）という流れであった。ここでは待機（8F）。
- 11:00 頃～
PM
- 12:00 過ぎ
- ・披露宴が行われるため、披露宴会場の隣の控室にて簡単な 1 回目のお色直し（4F）。
 - ・（同時進行で）披露宴の司会者との最終の打ち合わせ
 - ・親族などのスナップ撮影などを行う。
 - ・お色直しが終わったあとは再び 8F にて待機。
- 12:40 頃～1:00
- ・披露宴会場に潜入。撮影を行う。
- 1:06～
- ・8F にて 2 回目の衣装替えをはじめとしたお色直し。
（お色直しは 1 回目を除いてはすべて 8F で行われた）
- 1:27
- ・お色直し、新郎新婦のふたりとも終わる。再び 8F で待機。
- 1:35 頃
- ・次のお色直しの支度をアシスタントの方が行う。
 - ・この待機の間ビデオテープなどの交換。
- 2:05
- ・間もなく新郎新婦がお色直しのために戻ってくるといことでアシスタントと美容師が軽い打ち合わせ。
- 2:07
- ・新郎新婦が戻ってくる。3 回目のお色直し。
- 2:09
- ・カメラマンが入ってくる。当日使われた小物や化粧品などの撮影を行っているようであった。（10 分ほどして出て行った）
- 2:28
- ・お色直し終わり。
- 2:34 頃
- ・再び披露宴会場へ撮影に向かう。
- 3:00 過ぎ
- ・披露宴は終了。8F で待機の後、撮影も終了。

上記のタイムスケジュール（ の部分）から、4（披露宴会場）、5（写真撮影会場）、6（チャペル）、8（控室）とそれぞれの階を行き来しながら当日は進行していった。

3.分析

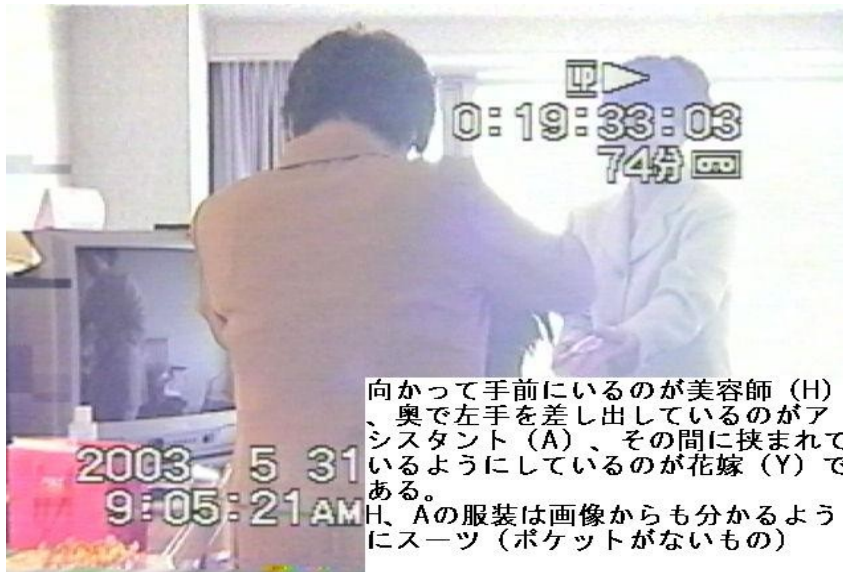
3-1.控室という認識

今回、調査の対象とした場所では、スムーズに作業を進めていた。しかし、時間内にやらなければならない課題は数多くある中で、花嫁、親族の着付けなどを手早く済ませ、お色直しも手早く行っていた。では、その空間を意味づけるものや作業をスムーズに進めるための何かはあったのか？

以下の場面は、花嫁の着付けの一環としてヘアスタイルを作っている場面⁸である。そして、実際の会話のやりとりが以下のトランスクリプト（会話場面）に掲載されている。

⁸ 画像データ、トランスクリプトなどについてはプライバシーを配慮して（同意書等で）許可を頂いてはいるが、この論文集以外で、個人の研究等以外の目的での転写はなるべく避けるようにして頂きたい。

トランスクリプトの見方としては、左端の数字が各行を示し、その人の発話を表している。(詳しい記号の説明については末尾の資料を参照してもらいたい)。



【画像データ1：会話場面 の様子(カメラ 4(DV))(2003.05.31.) (AM9:05:21)】



【画像データ2：別角度からの会話場面 (カメラ 5(DV2))(2003.05.31.) (AM9:03:37)】

《記号の説明》

H：美容師 A：アシスタント Y：花嫁 ((nod))：頷き
鏡：(正面にある)鏡 ?：視線の向きが不明 (())：必要な注記 (矢印)：音調の変化
(数字)：その秒数だけ沈黙があること。またごく短い場合は「(.)」で示す。
hhh：笑い ::：直前の言葉が延ばされている様子 //：参与者たちの言葉の重なり
〔行の下の部分はそれぞれの視線の向きを示している。〕

作り上げられていく。

ここで、Aは頷き((nod))を示している。Hのしている作業を見てそのやりとりに対しての頷きを表すというアシスタント個人としての役割（サポートする人の状況を判断し自分のやるべきことを確認、行う）をこなすことがここでのH-Yの会話の流れというメインのやりとりの中においては副次的な参与をしているように見えるということが言えるのではないだろうか？

【表3：会話場面 前半部分の流れ】

Yによる主張（「 <u>ちよろっと</u> 」） 意思確認 Hによる提案（「 <u>こな</u> 」） 了承...Aによる((nod))は場面全体に対しての副次的な参与

視覚（=鏡を通してのインタラクション）と音声（=会話のやりとりを通してのインタラクション）という複数の手段を用いてなされている。‘主張’とここで解釈しているのは、「／／あ」（3行目）という言葉によるものである。その後につづく「ちよろ：：っと」（4行目）というように、前の発話者の言葉を繰り返すことで自分が相手から発話ターンを受け取り、この場合だとYの意思表示であった「こなら（.）へんと：：～」（3行目）を理解したということになるのではないだろうか？また、その後続く「ちよろ：：っと（ ）だったんやな」（4行目）のうちの「だった」という過去形の表示といったことから一度はその（結婚式当日にやる予定の）髪型をやったことがあり¹¹、いわばそれをここで再現しようとしているのがこの場面ではないのか？という考え方もできる。

ここでまとめてみると、表4のように提示できるのではないだろうか？

【表4：会話場面 前半場面における流れ】

Y: 「要求 (=claim)」 - H: 「受け入れ + 提案」 - Y: 「了承 (=動作をやめること)」 (A: 場面への副次的な参与)
--

Yが出した要求に対してHは受け入れ（=「あ」という間投詞）と更なる提案を示し、「こうだったんやな」という確認をYに求める。Yは自身の要求が受け入れられそれが形となって示されたので、了承となる合図（=動作をやめる）をおくる。そしてYは再び作業をされる花嫁として場面が進められていく。

また、H自身の行っている複数の役割にも注目してみたい。役割ということに関連して、Goffmanの役割距離という概念がある。定義としては、「個人とその個人が担っていると

¹¹ このことについては、前撮り（実際に挙式の前に衣装を着て写真撮影などを行う。だいたい挙式の20日前くらいに行われるものらしい、詳細は以下を参考にしてもらいたい。<http://wedding.yahoo.co.jp/docs/howto/prepare/04/3.html>）やそういったリハーサルの際に一度行っているのではないかと思われる。確認を取ったところそうだろうという返答であった。

される想定される役割との間の乖離」(Goffman 1963=1980:115)ということになる。個人はその役割を拒否しているのではなく全てを受け入れる演技手にとってその役割の中に当然含まれているとみなされている虚構の自分を拒否している。いわば、個人が、その個人のものとして公的に受け入れることを嫌がっている自己を発生させるような場合である。例としては、医師が患者に対して「医師」としての役割(専門家)を担っているにも関わらず、おどけて見せたり、親のように親身な態度を示したりすることが挙げられる。そういった役割を演じることが翻って「医師」としての役割を十分に果たすだけの能力を持っているという表示にもつながる。

ここで、H個人が行っている役割について考えてみると次のようになるだろう。一つは美容師自身としての本来の役割であるヘアスタイル、メイクアップの作業の進行、二つ目はアシスタントに手伝ってもらいたいことの指示、花嫁に対して話しかけるなど言語的なコミュニケーションを図ること、そして三つ目は体の向きや動作など身体的なコミュニケーションによる意思表示といったものである。これら複数ある役割の中でこういったものが適宜選択されながら場面形成されているのか。ここで注目すべきはGoffmanの指摘とは違って、個人の判断に基づいて役割を果たすのではなく、周囲に依存しながらその役割を選択しているということであろう。3つのそれぞれを選ぶというわけではなく、それら複数を織り交ぜるといってこなししているのではないのか? 役割距離によって翻って(遡及的に)自身の役割を誇示しているというのではなく、むしろその場に適したものを場面に依拠しながら選択しているのではないだろうか。そういった複数の役割をこなすことがここにおけるスムーズに物事を進めるテクニックの一つだと言えるのではないだろうか? 例えばスタイリングをしながらYの指示に従って髪のを調整する、スタイリングしながらアシスタントに指示を出すなどといったことである。こういったことをその場におけるやりとりに依拠(=インデックス性¹²)しながらそのときに必要なものを作り上げていくということが確認できるのではないのか?

さらに、この場面においてはトランスクリプトに描かれているような気さくな話し方が参加者の中でなされていた。普通、「美容師 客」という「専門家 素人」の一例とも言えるような場面を想定した時、いくら親密であるといっても、そこにはある程度の「専門家 素人」関係から生じるとされる距離感が存在するだろう。西阪は専門家 素人関係について『「専門家」と「素人」、いわば「語る者 語る者」という関係にある』(西阪1990:7)と述べている。そのために専門家は素人に対していくつかのテクニックを使うだろう。髪型に対しても、美容師から客に話しかけるときは「こういう風にしてよろしいでしょうか?」、「～ですよね?」と相手を「お客様」として尊重しながら発話し、相手の発言を促すというテクニックが見られる、といったのが例としては考えられるだろう。

¹² インデックス性(=indexicality)というのは「文脈依存性」「文脈状況依存性」といったように訳される。もともとは論理学的概念を説明する際に用いられていたものだが、ガーフィンケルが拡大使用することで次のような意味を持つようになった。それは、「意味」というものが人々の行為する文脈や状況から「離れて」確定、位置づけされることはなく、発話や行為の「意味」というものは常にそれが生起する文脈や状況に依存する中で適切に見いだされるというものである(好井1993)。これと共に「相互反映性(=reflexivity)」という概念もあるがこれはまた後述する。

ではこの場合においては説明されるのだろうか？ここで注記すべきは、H - Y というのは「美容師 花嫁(客)」であるとともに親族という関係も持つことである。このことが顕著に示されるのは二人の言葉のやりとりに見られるのではないだろうか？こういったことをもとに再びこの場面を考えると、YはBに対して明らかに気さくな話し方をしている。また、後述するメモの記述(3-2.)にもそれは見られる。しかし、対照的に、この場面の前に美容師が撮影者に話しかけるシーンがあったが、そのときは丁寧語を用いていたし、カメラマンに対しても(資料参照)丁寧語を用いていた場面が何度か見られた。ここではさらに細かく使い分けがなされたということではないか。気さくな言葉を用いることで、より親近感が生まれているように受け取ることができる。親近感を生むことで、より普段に近いような状況を作ることが可能になる。ある意味、言葉を利用したひとつのテクニックと言えるだろう。「美容師 - 花嫁(客)」というカテゴリーの存在、また親族という間柄も背景にしつつ、言語的コミュニケーションを交えることで、親密さを浮かび上がらせていることが言えるのではないだろうか。

3-1-2.Hの持つくしをめぐっての失敗の対処の仕方(後半)

会話場面 後半部分の流れをまとめてみると表5のように示すことができる。

【表5：会話場面 後半部分の流れ】

<p>何気なくAによって手が差し出されている(Hの の時に既に差し出された(23行目)) Hはそれを見ずに、胸元にポケットを探す() その後差し出された手に気づき、苦笑交じりで発話を行っている(22~25行目)</p>
--

22行目のHの「あらっ」という沈黙を破る発話の後の笑い(25行目)がAからYへと移ることでその場の参与者(A、Y)にHの失敗が認識されていく。これでトラブルが解決したように思われるが、Aのスーツにはポケットはついていない(29行目、 の部分)。Aは何気なくポケットに入れるような仕草をする。結局、A自身が手でくしを持つことにより、事態は収束し、作業が続けられていくというのがここでの場面の説明になるだろう。

Hの美容師というのはこの場において花嫁や親族など複数の着付けをメインに行なう、いわば統括者の立場にある。Aの差し出した手は「空間における適切な配置を組織することで、その場面を秩序だったものにしていく」(高岡・行岡 1997:163)とあるようにHの立場を統括者として秩序立てるものとして作用している。また、トラブルを少しでも小さなものにしようとするためのフォローとして位置づけられるのではないか。

この場面のAからYへの笑い(30行目)について、「『笑い』をとおして、『相手が何について(あるいはどうして)笑っているのかを自分も承知していること、そしてそれを自分にとっても笑うべきものにとらえていること』」(西阪 1997:40)が観察可能になる。

Hは笑うことを通して、失敗を自ら率先するような形で認め、トラブルを修復しようとしている。それを周囲に承認させるように見えるが、どうなのか？Yに関して自分の後側で生じたことをどう把握し、「笑った」のか？Hが笑うことにより、参与者はその笑った状態の承認を示す。ここでもし、参与者が笑わなければ、笑いだけが浮き彫りにされ、トラブルがむしろ強調されてしまっていたらう。

しかしここでは、参加者が笑い、それを「控室という空間であるからなしえること（失敗）」であり、「こういう慌しい状態だし、普段着慣れないものだから仕方ない」といった控室という空間を考慮した認識をすることでその秩序が維持されている。「家で」（28 行目）とHが場所に関する発言をしていることも、ここは家ではない空間であるという認識がなされている一つの証拠となるだろう。参加者 本人（場面で支えられている）相互の協力的な関係がなければそれぞれの立場は守られない。

時間に追われる慌ただしさと、そこから生じる緊張した場面の雰囲気などからもいかにして課題（＝時間内にドレスアップや着付けを済ませていくこと）を達成していくかという難しさが浮かび上がってくる。それを達成するためには互いの協力的な姿勢が必要である。参加者たちの笑いは遡及的に本人（H）の立場を意味づけ、この場におけるそれぞれの協力的な態度も示しているし、同時に、鏡という道具の特性をいかしての状況把握により、参与状況を臨機応変に変えている事例だと位置づけることができるだろう。

3-1-3.この場面における結論

会話場面 を前半部分と後半部分に分けて場面を見てきた。ここの冒頭に挙げていた疑問は、「やらなければいけない課題が数多くある中で作業を手早く行うためのものはあったのだろうか」といったことであった。会話場面 の前半部分では複数のコミュニケーション（視覚、音声）や言葉の細かな使い分けをすることでより緻密なやりとりがなされていることや複数の役割を、その場の必要性、つまり直前のやりとりに応じて使いこなすこと、また言葉遣いを駆使したテクニックを用いるといったことが観察可能であった。また同じ場面の後半部分では、笑いを通してのその場面の認識、美容師という立場を周囲の参加者によって支えられているということが分析から解釈可能となった。そういった中で見えてきたことは次のようなこととなる。それは一般的なカテゴリーや概念といったもの（例えば美容師 客といったある種の作られたイメージ）では描ききれない、もっと詳細なやりとりが会話やインタラクションの中で行われ、かつ、その場での意味づけや秩序付けといった作業が絶え間なく変化しているということである。

3-2.時間の把握 メモによる時間の流れ

当日は様々な作業があわただしく並行して行われ、なおかつ、正確にこなされていたようだ。その中で重要な役割を果たしたと思われるのがメモの存在である。単なる紙切れとも捉えることが出来そうなこのメモがいつ作られたものなのかは正確にはわからない¹³が、当日はメモをもとに着付けの支度、また披露宴会場の隣の控室などのお色直しなどの支度がなされていた。具体例を挙げると、メモを用いてやりとりが行われたり、支度の際の手助けとなったのは、画像データ3のとき、そしてお色直しの最後となる午後1時35分頃などである。こういったメモを介してのやりとりの中にその場を秩序付けるものは存在しているのか？この一日を通してそれぞれの場面でのメモの活用のされ方を追いかけて

¹³実際に調査の後に聞いてみたが、本人もきちんとしたことは思い出せないとおっしゃられていた。しかし、前撮り等のスケジュールを考慮すると本稿のような推測ができるのではないかと？

みたい。それによってその場の秩序付けの様子や、次の場面構成につながる要素となるものなどを見ていこうと思う。

メモの用いられていたシーンは具体的には以下のようなになる¹⁴。

AM8:59 頃...メモが場面の中に出てきている。

(A がウェディングドレスを移動させるなどの作業をこなした後 H の後ろから作業を見ている。そのときに H が指示を出すように「メモを見ておいて」といった話をする。メモをミーティングの代わりとして用いているような場面である。)

AM9:06 ~ 07...入場のときの髪型の確認。

(挙式と披露宴では髪型を変えるのかそのままで行うのかといったことを話している。このとき 1 ~ 2 秒ほどの沈黙があり、3 人ともメモのほうに視線が向けられている。それから間もなくして になる。)

AM9:07 頃...花嫁のウェディングドレスを着る際に必要な付け毛についての話。

(メモを見ながら作業を進め、確認作業も行っている様子)

AM10:34 頃...場所の移動とその準備に関して。

(挙式の後に続く披露宴の前に花嫁の髪型を変えるということでそのための支度をどうなるのか? ということでメモを見ての確認をきっかけに話が進んでいく。ここでは確認を取るためにその場にいたカメラマンに披露宴の際に控室が使えるのかどうかを聞いたりしている。)

PM12:40 頃...画像データ 4 を参照。

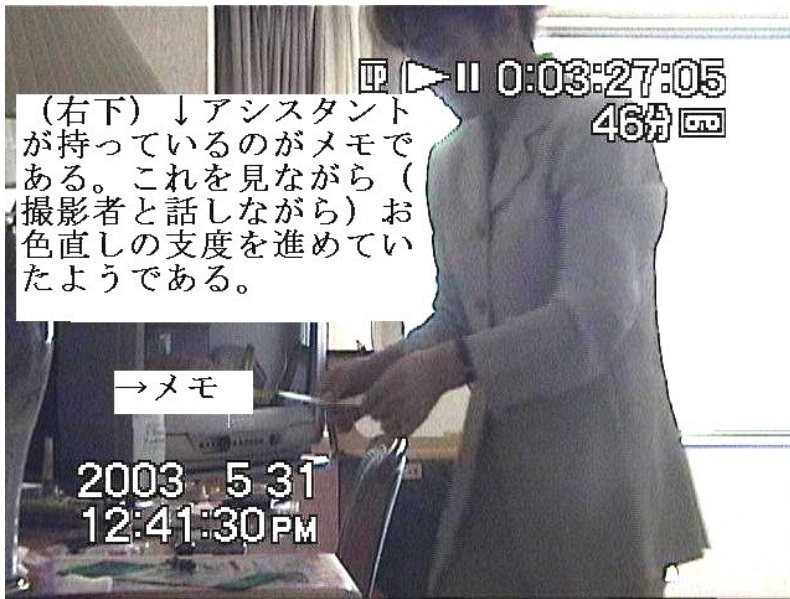
(美容師がいない間、次のお色直しに必要なドレス、小物類などの準備をアシスタントだけが控室に戻って行っている。)

PM1:35 頃...次のお色直しの支度。

(アシスタント一人で行っていた。新郎新婦の二人分を支度するのだが、いつも花嫁のドレスの方から支度をしていたという記述が執筆者の調査メモにあった。)

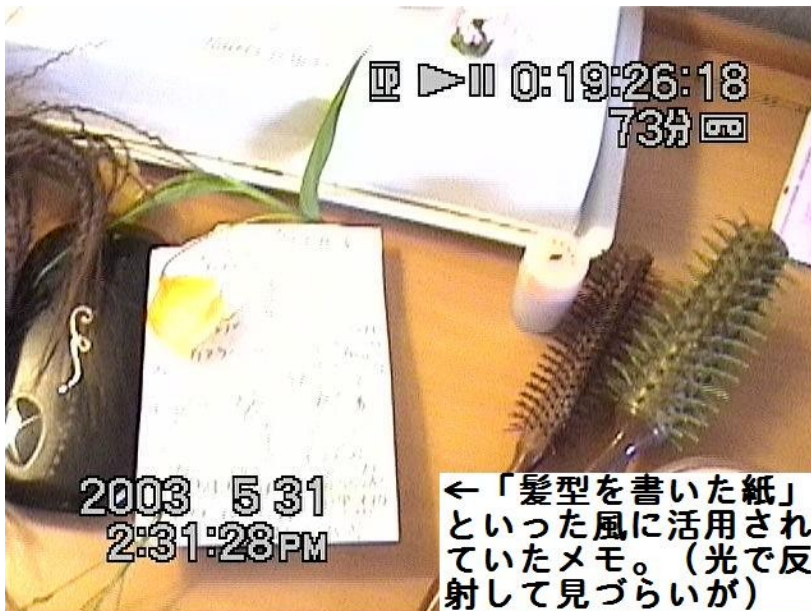
メモの活用の具体例の一つが画像データ 3 (上記のシーンだと に該当) である。そしてここで議論の中心となるメモというのが画像データ 4、5 (シーン 以降に撮影したもの、既にお色直しなどは全て終わっていた頃) になる。

¹⁴ メモを介してのやりとりについて。 に関しては、詳しいやりとりは卒業論文本体の原稿の資料のトランスクリプトを参照していただきたい。 についてはアシスタント一人で作業を進めていたということもあり、トランスクリプトは省略することにする。



【画像データ 3：アシスタント(A)がメモを見る様子(カメラ 4(DV))、(2003.05.31) (PM12:41:30)】

そして、次の画像データが、実際に調査の中で使われていたメモである。(画面中央左側) その際、このように鏡台の近くなど比較的作業をしても分かりやすい場所に置かれていたのが多かったように思われる。おそらく、分からないことがあった場合、すぐに確認できるように配置していたのだろう。



【画像データ 4：それぞれのやりとりの中で使われていたメモ(カメラ 4(DV))、(2003.05.31)(PM2:31:28)】



【画像データ 5: 画像データ 4 の部分的拡大図(カメラ 4(DV))、(2003.05.31)(PM2:31:28)】

画像データ 5 の丸 (中央下部) で囲まれた部分には 3 つくらいの塊で何か書かれているように見える。ここに書かれていたものは何なのか? 拡大して分析した結果、左側から順に日付と花嫁の名前、結婚式というのが読むことが出来た。これらの画像データに実際に記載が確認されたのは花嫁のそれぞれの服装に応じた髪型、髪につけたり、衣装のポケットに挿し込んだりする生花(新郎新婦二人ともつける場合もあった)、それぞれのときに着けるとされるアクセサリ類、などであった。この画像ももともとは、画像データ 5 から伺うことができるように、鏡の前に化粧道具などと共に置かれていたのでデータのひとつとして撮影したものであった。

3-2-1.それぞれの認識

メモを介してのやりとりの一部をこれから取り上げていく。実際のやりとりは、トランスクリプトを参照してほしい。

【会話場面 AM9:07:05 頃~ 9:07:30 頃】カメラ 5 (DV 2)

1Y: (4) あ、そうかぁ もう髪型変えんのやな? (上?) とって花にするだけやな?
((鏡を見ながら話をしている))

2H: ((作業を一度止める))

3Y:

4H: うん、そうやなぁ ふ、ふうん(?) = うん、
((髪を見ている))

5A: = CR の 5 ってかいてあるんは? =
((H を見ていたが、メモを持ち出して H に問いかける))

6Y:	／／あっ ほうじゃ ほうじゃ()ほうじゃ() ((ほうじゃは回数を追う毎に小さくなる))
7H:うしろ(.)うん、ほのとき ¹⁵ は：：／／な(.)付け毛のときは：：ほのCRの5をつけて ((身体の向きを A に向けたり、メモを指差して話している))	
8H:ほんで花((咳))前(.)つけるけん =	
9A:	= でベールは脱ぐん? =
10Y:	／／うん(.)取る
11H:	= うん／／ベールは取るん =
12A:	=
13A:うん、とるん ふん うん ((この後、メモは鏡台の周辺に置かれ作業が続けられていた))	

ここでは、メモをもとにして進行中の作業の確認がなされている。「CRの5」という(専門的な)言葉は何かと思われるが、会話から推測すると付け毛の種類のような¹⁶。確かに、この場面が付け毛をはじめとした多くの小物類が散乱した状態だったのは画面からもうかがえることである。ここで注目すべきは、メモや会話を通して参与者(H、Y、A)それぞれがなにかを共有しているということである。6、7行目の一見するとイレギュラーなHとYの発話の重なり(割りこみ?)は、「ほうじゃ¹⁷」という言葉からも見られるように、何かを思い出して肯定していると解釈できるのではないか?

これは串田が述べる、引きとりの際の「共同追加想起の促し」(串田 2002a:48)に類似したパターンのように思われる。引きとりのパターンの一つとされる「共同追加想起の促し」とは、「過去に共に参与したあるできごとを一人が想起したことが表示ないし主張されたあとでもう一人がその出来事についてさらなる追加的な想起を行う(略)相手がその出来事を『知っているはず』であることに指向した発話デザインで行われ、想起が『共同で』行われていることを促しているもの」(串田 2002a:48)である。しかし、ここでいう引きとりとは、例えば、「これはみかんとりんごです」という文を一人が「これはみかんと...」といった後にもう一人が続けて「りんごです」と言って文章を作り上げていくように、あくまでも(統語論的に)ひとつの文章をふたり(複数)が引き継ぐことによって起こるものである。この点において「引きとり」は、場面に該当しないと思われる。だが引きとりに類似した場面と言えるだろう。

もう一つの可能性としては「割りこみ¹⁸」が考えられる。この割りこみが起こりやすい

¹⁵ 「ほのとき」というのは方言で意味としては「そのとき」といった過去のあるときのことを指し示す言葉になる。

¹⁶ 後で、参与者たちに確認をとったところ、やはり付け毛のことをさしていたようである。

¹⁷ 「ほうじゃ」は方言である。その意味としては「そうそう」といった肯定の意味を示すものになる。

¹⁸ 割りこみと聞くと否定的なイメージを伴いがちだが、必ずしもそういうものだけでなく、「あいづち」や「うなずき」などの支持作業を要請する形で相手が割りこんでいくような

場合としては次のようなものとされる。一つ目は現在の話者が相手に質問をする場合、二つ目は会話の中で、ひとつの文を共同で作り上げる（発話を理解していることの証左として発話者が完成させるべき文を途中から作り上げるようなパターン）の場合、三つ目は現在の話者に対する「相手の早すぎる反応」（話者の発話を聞いていることを表示するために次の発話を先取りするようなパターン）の場合、そして四つ目は、現在の話者のトピックに全く興味関心がなく、自分が展開したいトピックがあるという場合である(山田・好井 1991)。

この四つのパターンをもとに会話場面 を考えてみる。一つ目は、質問の対象が異なるために違うと考えられる。二つ目は先述した串田の「引きとり」も含んだものと考えられるので該当しないと考えてよいだろう。その理由としては「引きとり」が「一人の発話が完結しうる地点¹⁹を迎える前に、もう一人がその発話に統語的に連続するようにデザインされた発話を行う」（串田 2002a:38）ことに対して「割りこみ」は、「現在話している人が自分の話を完了しうる以前に、すなわち現在の話し手が話している最中に、次の話し手が話しはじめること」（山田・好井 1991:239）というように、「連続する」ことを問わない、より広い概念を持つからである。つまりは「割りこみ」が「引きとり」を含んだ形になるからである。（割りこみ 引きとり）三つ目、四つ目は可能性としては有りうるものだと思う。いずれにしろ、その直前のやりとりによって Y の中で何かが思い出されたのは事実だろう。そういった意味においては何かを促しているとも考えられる。では、ここで起きていることは何なのか？もっと詳細に見ていくことにする。その前に表 6 で会話場面を簡潔にまとめ直してみる。

【表 6：会話場面 でポイントとしている部分の簡略な流れ】

<p>(行数、発話している人物：会話の内容、(解釈)という順で記載)</p> <p>1Y:もう髪型... (質問)</p> <p>4H:うん... (答え)</p> <p>5A:CR の 5... (新たな質問)</p> <p>4H うん... (A に対しての答え? 同意?) 6Y:ほうじゃ... (どう解釈?)</p> <p>7H:ほのとき... (答え)</p> <p>H A でのやりとり</p>
--

表 6 から次のようなことが分かるだろう。1 行目と 4 行目における Y H (質問 答えという隣接対²⁰の構造が見られる) のやりとりがなされた後、5 行目の A による質問が行

肯定的なものもある。肯定・否定を問わず、今の話者を遮る形で次の話者が話し始める行為のことを言うのである。

¹⁹ 「完結しうる地点」を言い換えるなら、「潜在的完結点(possible-complication-points)」となるだろう。具体的には、「今の話し手がどこで話を終えるかは、何らかの仕方で聞き手に予期されるということ」（好井ほか 1999:5）である。

²⁰ 隣接対というのはシェグロフ(Schegloff E.A.)らによって呼ばれているものである。山崎・西阪などを参照すると、具体的には、「質問 応答」「呼びかけ 応答」「挨拶 挨拶」

われる。ここでは A はメモをわざわざ持ち出して質問をしていることから、(メモに書かれている)内容が大事だと理解しているのだろう。それに対して、H が「うん」と曖昧な返事をしている。聞き手に対して適切にある課題を達成するための工夫として、「答える権利はとりあえず自分にある」ことを示している。しかし、「うん」という工夫がなされていないが、「ほのときは：：」と語尾を延ばしていることから、スムーズに会話が進んでいないことがわかる。前後の短い沈黙や語尾を延ばしている部分が目立っていることから、H は A から発せられた質問に対応する答えとなるものを探している状態と考えることができるだろう。そして間に挟み込まれる形で 6 行目の Y の「あっ ほうじゃ ほうじゃ () ほうじゃ ()」(= で示している注目部分) がある。この「あっ」は何かを自分が思い出したという (自身の) 状態変化 (= Change of State Token) を相手に示す想起の「あっ」と言える。では、Y は何を思い出したのか? ここで話題になっている付け毛に関するものなのか? そうであるなら、「ほうじゃ」の後、共通の話題を思い出したということで会話のターン (= 発話の権利) が Y に移ってもおかしくはない。しかし、実際は H A のままで会話が続いている。

こういう状況が考えられるものとしては、先ほど示した見解も考慮して、二つの可能性が考えられる。一つの可能性は Y の発話が肯定的なものであった (そしてそれを予期したがために早く反応してしまった) こと、もう一つの可能性としては、全く別のことでありその場においてはむしろ関係の無いもので聞く必要がない / 自分が展開したトピックがあったがうまくいかなかった、といったものが考えられる。ここでは前者の肯定的な発話が当てはまると言えるだろう。それは、「付け毛」というこの場面における答えとなる言葉を H が言うよりも前に Y が割りこんでいること (= 好井のいう三つ目のパターンに該当)、「あ」の後に続く 3 回の「ほうじゃ」は回数を追うごとに声が小さくなっていることから解釈可能であろう。としたら、「付け毛のときは：：」と語尾を再び延ばしているのもトラブルに対する対処として、自身の発話ターンを確認しながらの発言と捉えることができるだろう。また Y の視線の向きに注目すると、H や A といった人物を鏡の中から見るというのではなく、むしろ鏡の中の自分を見ているように見える。

Y は、メモが用いられていた の場面から引き続いてこの場面での一連のやりとりを通して (「CR の 5」がどのように用いられていたかを) 思い出すことが出来た。しかし、この場面において答えるべきは「うん」というように発話権を維持している H である。そのやりとりを邪魔しない形で、だが、ここに参与する形という状態を示すために「ほうじゃ」を繰り返した。繰り返すことで一旦は移動しそうな発話権を再び H に戻すようにしたのではないか。すなわち、3 人のやりとりというのがきっかけとなって Y はその当時の衣装を着たときの状況を思い出し、思い出したことの示す「確認」として発話して

といった二つ一組の対として類型化された発話類型である。そして以下のような特徴がある。二つの発話からなる隣接して位置づけられる。ただし必ずしも隣り合っている必要はない。「質問」する人と「応答」する人が違うように、異なった話し手によって作り出される。対の最初の部分 (第一成分: 例えば「質問」) と二番目の成分 (第二成分: 例えば「応答」) の間に相対的な順序が存在している。一方が他方を特定化する。ただし、この関係は一方的なのではなく、逆に応答者の「応答」という行為が前の発話者の行為を逆及的に「質問」として位置づけるようなこともある (山崎・西阪 1997; 好井ほか 1999)。

いたというのがこの場面ではないか？相手の発話を注意深く聞いていて、参与状況を把握していた、それを示すために次に話すべきことを予期したことが裏目に出てしまったともいえる場面だろう。

3-2-2.結論

これまでに述べてきたことをまとめてみると表7のように示すことができる。

【表7：会話場面におけるH、Y、Aにおけるメモの捉え方】

(それぞれの間においての認識)

H Y：過去のある時点における確認、合意

H A：仕事の素材としてのメモの存在

(個人がどのようにメモを位置づけているのか)

A...メモに対して工作上必要かつ重要なものという認識を示している立場。

(Hからの指示などを受けているという背景もある)

H...メモに関して指示ができる立場(統括者の立場)でありメモに直接的に仕事として携わることのできる立場。

Y...メモに書かれていることを(Hと)共に思い出すことは可能だがそれを指示すべき立場ではない(むしろ花嫁としてH-Aによって作られていく立場)。

メモに対して間接的に接する立場。

Yは、HがAに対しての答えを理解している。場面を維持しながら、理解していることを表示している(「ほうじゃ」という発言)。

メモを介してのやりとりにより、参与者たちは「今 ここ」で参与している場面から、以前同じ髪型をおこなったであろう「過去のある場面」までさかのぼって、その状況をそれぞれが共有しているのではないか。それは、メモという存在によって場面が規定されているのではなく、メモが「重要なもの」とみなす参与者の間での合意があって、その合意が相互行為として表れ、「重要なもの」としてメモが位置づけられていく。このようにメモがメモとなるのは過去のある時点における合意に従って今の状況を作り上げていくことが「今-ここ」にいる参与者によって合意されているからである²¹。過去のあることが今を

²¹ ここで説明していることは「相互反映性/文脈状況再帰性(=reflexivity)」に集約することができ、次のように説明されるだろう。参与者たちは叙述を通して一つの共通の「リアリティ」を作り上げている。リアリティというのは人々がその内部でそれについて語れば語るほど雪だるま式に確固とした現実感を帯びてくるもの(勿論その逆の状況も)である。その「リアリティ」と叙述との相互依存関係、相互増幅関係、相互敷衍関係、つまりフィードバック関係のことを相互反映性という(Leiter 1980=1987)。ただし、ここで用いる「文脈」というのは「発話を行う人々の置かれた環境」(Leiter 1980=1987:335)と誤解を招くことのないように定義づけしている。また、文脈依存性との関係については、こういう風に言えるだろう。物事の意味を確定していく作業において、文脈状況と確定作業はそれぞれに結びついていて依存している。また、一つ一つの意味確定の作業自体が、文脈状況全体に立ち返ってそれを構成し、確固たるものへと構築していくはたらきがある(好井 1993)。

決めるのは十分に考えられることであるが、それと共に今が遡及的に過去を位置づけていくということもいえるのである。それをこの「メモ」の場面が示している。そして、その場面ごとの位置づけに応じて、互いの参与状況を変化させ、その場にふさわしい参与を示している。

4.考察

本稿では控室という空間でどういったことが参与者たちの中で達成されているのかについてみてきた。一見、当たり前のように考えられることであっても、詳細に場面を描き出すという方法を用いることによって、常識の枠組みではとらえきれないような新たな一面を発見することが可能となる。また、何気ない仕草や会話の積み重ねの中で場面が進むことにより、行為の複雑さが浮き彫りになる。それが各章や各節で繰り返し述べてきたことだろう。

3-1.においては、前半部分では緻密な確認作業、後半部分では、笑いの連鎖であったり、一見その場を統括しているように思われる人物（美容師）でも、実はその状況を見守る参与者（アシスタントや花嫁など）によってサポートされ、そのことで遡及的に統括者として成立しているという状況があるといえるだろう。また3-2.ではメモによる時間の流れのつながりなどではメモ自体が場面を規定するのではなく、むしろメモを使う参与者たちがメモをメモとしてその場における相互行為の中で位置づけるという相互反映性 (reflexivity) と表されるようなプロセスをたどることで場面が作られていくといったことが観察可能であった。

以上のようなことから提示できるのは、こういったことではないだろうか？それは空間ありきではなくむしろ、参与者たちの意味づけや秩序づけによってその空間が「意味を成す」空間として存在するということである。控室という空間だからそれぞれの行為がなされていくというのではない。むしろ、参与者たちがその場においてどう空間を認識していくかということを経験や身体的なコミュニケーションを図りながらその認識自体さえも作り上げていくのである。参与者たちも気付いていないようなふるまい、行為の積み重ねのうちにホテルの一室が控室、そして美容室に類似した空間として位置づけられていき、課題達成がなされていったことがいえるだろう。

「何が重要で」、「何が正しいのか」に関心を持つのではなく、相互行為そのものに着目するという「エスノメソドロジー的無関心」という視座に立つことでリアリティのある参与者たちの活動をいきいきと詳細に描き出すことができる。そういった、複雑な人びとの相互行為から生まれてくるものこそがエスノメソドロジーを通して最も訴えかけたい重要なものとされるのだろう。本稿のようなミクロ的分析及びその手法を提示することは、エスノメソドロジーの魅力を示すそのひとつに過ぎないかもしれない。しかし、ローカル(局所的な)分析が様々な場面で行われ、人びとの実践の仕方という「事実」が積み上げられていくことによって、それが一過性のものではなく、あらゆる社会の基盤通ずるものを導き出すこともできるのではないだろうか。

謝辞

この論文を執筆するにあたり、沢山の方々にご協力をいただいた。撮影というお願いにも快く応じてくださった美容室 H 様、花嫁の Y 様、インタビュー取材にご協力くださった美容室 T 様、N 様、また結婚式の会場となったホテルの方々、度重なるご迷惑をおかけしたにもかかわらず、引き受けてくださったことに心から感謝の意を申し上げる。

指導教官の榎田美雄先生をはじめとして、岡田光弘先生（国際基督教大学）、藤守義光先生（工学院大学）、阿部千恵子先生（国際医療福祉大学）にはゼミナールでの発表の際に貴重なお話や参考文献等についてご指導を頂いたにもかかわらず、それを十分に生かす能力が無かったことをこの場を借りてお詫び申し上げます。また、ゼミナールの方々をはじめとしてほか沢山の方々にアドバイスしていただいたことに対しても深く感謝している。末筆ではあるが、謝辞の言葉に代えさせていただく。

文献表（参考文献および参考 URL）

（参考文献）

- Austin, John Langshaw, 1970, *Philosophical Papers*, 2nd edition, Oxford University Press. (=1991、坂本百大監訳 『オースティン哲学論文集』 劉草書房：379-409。)
- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind : Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan (=1998、西阪仰訳 『心の社会的構成 ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』 新曜社。)
- Garfinkel, Harold, 1967, *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall. (=1987、山田富秋ほか編訳、『エスノメソドロジー 社会学的思考の解体』 せりか書房:217-295。)
- Giddens, Anthony, 1997, *SOCIOLOGY* Third edition, Cambridge: Polity Press. (=1998、松尾精文ほか訳 『社会学』 而立書房。)
- Goffman, Erving, 1959, *The presentation of self in everyday life*, New York: Anchor Books. (=1974、石黒毅訳 『行為と演技 日常生活における自己呈示』 誠心書房, 1961, *Encounters: Two studies in the sociology of interaction*, New York: Bobbs-Merrill Company, Inc., (=1985、佐藤毅・折橋徹彦訳 『出会い 相互行為の社会学』 誠心書房。)
- , 1963, *Behavior in public places: notes on the social organization of gatherings*, New York: Free Press. (=1980、丸木恵祐・本名信行訳 『集まりの構造』 誠心書房。)
- , 1967, *Interaction Ritual: Essays on Face to Face Behavior*, Anchor Book (=1986、広瀬英彦・安江孝司訳 『儀礼としての相互行為』 法政大出版局。)
- 井上俊ほか編、1995、『岩波講座 現代社会学 第2巻 自我・主体・アイデンティティ』 岩波書店。
- 井上俊ほか編、1995、『岩波講座 現代社会学 第4巻 身体と間身体社会学』 岩波書店。
- 榎田美雄、1991、「アグネス論文における〈非ゲーム的パッシング〉の意味 エスノメソドロジーの現象理解についての若干の考察」『年報筑波社会学』(3)筑波社会学事務局:74-98。

- 、1996、「エスノメソドロジーと権力 エスノメソドロジーは権力をどのように扱うのか」『社会学ジャーナル』(21)筑波大学社会学研究室:103-113。
- 編、1998a、「ラジオスタジオの相互行為分析 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第2版)」徳島大学総合科学部。
- 編、1998b、「エスノメソドロジーとその周辺 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集」徳島大学総合科学部。
- 編、1999、「エスノメソドロジーと福祉・医療・性 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集」徳島大学総合科学部。
- 片桐雅隆編、1989、『意味と日常世界 シンボリック・インタラクショニズムの社会学』世界思想社。
- 加藤春恵子、1993、「エスノメソドロジー」、森岡清美ほか編、1993、『新社会学事典』有斐閣:99-100。
- 小林美保、2001、「陶芸教室のビデオ分析」『現代社会の研究 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集』徳島大学総合科学部:75-86。
- 小濱智子、2001、「美容院における相互行為分析」『現代社会の研究 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集』徳島大学総合科学部:63-74。
- 幸田裕紀、2001、「特別養護老人ホームにおける高齢者とスタッフの相互行為分析」『現代社会の研究 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集』徳島大学総合科学部:23-42。
- 栗丘幹英、1993、『役割行為の社会学』世界思想社。
- 串田秀也、2002a、「統語的単位の開放性と参与の組織化(1) 引き取りのシークエンス環境」『大阪教育大学紀要 第 部門』50(2):37-64。
- 、2002b、『対人サービス組織における「規則語り」の会話分析的研究 学童保育を事例として』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(c)(2))研究成果報告書。
- Leiter, Kenneth, 1980, *A Primer on Ethnomethodology*, New York: Oxford University Press (=1987 高山真知子訳 『エスノメソドロジーとは何か』新曜社。)
- Maynard, Douglas W, 2003, *Bad News, Good News: conversational order in everyday talk and clinical settings*, Chicago: The University of Chicago Press, Ltd: 64-87
- Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self and Society*, Chicago: The University of Chicago Press. (=1973、稲葉三千男ほか訳 『現代社会学体系 第10巻 精神・自我・社会』青木書店。)
- 皆川満寿美、1993、「『無関与』の協働的達成」『現代社会理論研究』3:47-67。
- 見田宗介、1979、『現代社会の社会意識』弘文堂。
- 西阪仰、1990、「心理療法の社会秩序 セラピーはいかにしてセラピーに作り上げられていくか」『明治学院大学社会学部附属研究所年報』20:1-24。
- 、1997、『相互行為分析という視点 文化と心の社会学的記述』金子書房。
- 、2001、『心と行為 エスノメソドロジーの視点』岩波書店。
- 、2003、「参加の構造とモノの对象的性格」『研究会年報』33:191-201。
- 小川文弥、1985、「相互行為」、見田宗介ほか編、1985、『社会学事典』弘文堂:559-560。

- 奥村隆編、1997、『社会学になにができるか』八千代出版。
 、1998、『他者という方法 - コミュニケーションの社会学 - 』日本評論社。
- Psathas, George, 1995, *Conversation Analysis: The Study of Talk-in-Interaction*,
 Thousand Oaks, CA: Sage Publications. (= 1998、北澤裕・小松栄一訳、『会話分析の
 手法』マルジュ社。)
- 佐藤郁哉、1992、『フィールドワーク 書を持って街へ出よう 』新曜社。
- Sacks Harvey, Emanuel A. Schegloff, and Gail Jefferson, 1974, "A Simplest Systematics
 for the Organization of Turn-Taking-System for Conversation." *Language*
 50:696-735
- Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks, 1973, "Opening up closings." *Semiotica*
 8(4):289-327 (=1989、北澤裕・西阪仰訳 『日常性の解剖学 知と会話 』マルジュ
 社。)
- 高根正昭、1979、『創造の方法学』講談社。
- 高山啓子・行岡哲男、1997、『道具と身体の間秩序』、山崎敬一・西阪仰著、1997、『語
 る身体・見る身体 <附論> ビデオデータの分析法』ハーベスト社。
- 富永健一著、1995、『社会学講義 人と社会の学』中央公論新社。
 、1999 『仕事の中での学習』、東京大学出版会。
- Walter Edwards, 1990, *Modern Japan Through Its Weddings: Gender, Person, and
 Society in Ritual Portrayal*, California: Stanford University Press.
- 山田富秋・好井裕明著、1991、『排除と差別のエスノメソドロジー』新曜社。
 著、1998、『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房。
- 山崎敬一・西阪仰著、1997、『語る身体・見る身体 <附論> ビデオデータの分析法』ハー
 ベスト社。
- 好井裕明、1993、『インデックス性』、森岡清美ほか編、1993、『新社会学事典』有斐閣:75。
 好井裕明ほか編、1999、『会話分析への招待』世界思想社。

(参考 URL)

- ホテル K (仮名) 年代不明、<http://www.hotelclement.co.jp/index2.html> (2003.11.02.)
 西阪仰、2003、『マクロ的構造そのものを語ること』『2002年7月13日早稲田社会学会の
 シンポジウムより』http://www.meijigakuin.ac.jp/%7Eaug/rc_pf.html(2003.11.02.)
 Yahoo、2003、<http://wedding.yahoo.co.jp/docs/howto/prepare/04/3.html>(2003.06.12.)
 財団法人 京都和装振興財団、年代不明、<http://www.kimono.co.jp/wasou/index.html>
 (2003.08.01.)

資料

トランスクリプト記号について

本稿にも主に用いた記号については記載したが、不十分な点もあると思われるので改めてここで記号とその説明をしたものを掲載したい。ここでの記号の説明などに関しては山崎・西阪(1997)、好井ほか(1999)を参考にしている。

- ・ / / **複数行にまたがる二重スラッシュ :**
 参加者たちの言葉の重なり、あるいは「割りこみ」が始まる箇所を示す（重なり
 の終わる箇所は示されないこともある）
 - ・ = **言葉と言葉の間、もしくは行末と行頭に置かれた等号 :**
 言葉が途切れなくつながっていることを示す
 - ・ () **丸括弧 :**
 何か言葉が話されているが、聞き取り不可能であることを示す。また、聞き取り
 が確定できない場合は、当該文字列が丸括弧で括られる。
 - ・ (数字) **丸括弧でくくられた数字 :**
 その数字の秒数だけ沈黙があることを示す。また、ごく短い間合いは「(.)」とい
 う記号で示される。
 - ・ (()) **二重丸括弧 :**
 そのつど必要な注記であることを示す
 - ・ : : **コロンの列 :**
 直前の音が延ばされていることを示す
 - ・ ? **疑問符 :**
 語尾の音が上がって区切りがついたことを示す
 - ・ 。 **句点 :**
 語尾の音が上がって区切りがついたことを示す
 - ・ () **上向き矢印 :**
 音調が極端に上がっていることを示す
 - ・ () **下向き矢印 :**
 音調が極端に下がっていることを示す
 - ・ hhh **h の列 :**
 呼気音を示す
 - ・ .hhh **直前にピリオドを伴う h の列 :**
 吸気音を示す
 - ・ MMM **各発話の上もしくは下におかれた同一文字の列 :**
 その文字 (M) で示された特定の事物もしくは人物に視線もしくは顔が向けられ
 ていることを示す
- 例) 鏡鏡鏡...鏡の方向を向いている、もしくは見ていることを示す
 下下下...下の方向を向いている、もしくは見ていることを示す
- ・ ((nod)) **二重丸括弧でくくられた nod :**
 うなずきを示す
 - ・ H : 美容師
 - ・ A : アシスタント
 - ・ Y : 花嫁
 - ・ C : カメラマン

徳島大学総合科学部社会学研究室報告 既刊（国立国会図書館等所蔵）

- | | | |
|---|--|------------|
| 1 | エスノメソドロジーとその周辺
- 平成9年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1998年3月発行 |
| 2 | ラジオスタジオの相互行為分析
- 平成9年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) - | 1998年10月発行 |
| 3 | エスノメソドロジーと福祉・医療・性
- 平成10年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 1999年2月発行 |
| 4 | 障害者スポーツにおける相互行為分析
- 平成11年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) - | 2000年2月発行 |
| 5 | 日常生活の諸相
- 平成11年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2000年2月発行 |
| 6 | 現代社会の探究
- 平成12年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 - | 2001年2月発行 |
| 7 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第一版) | 2003年2月発行 |
| 8 | インタビューと対話の相互行為分析 気配りと配慮の社会学
平成14年度徳島大学総合科学部社会調査実習報告書(第二版) | 2003年9月発行 |

社会学の窓 - ドラマティックな日常生活 -

(平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール ゼミ論集 -)

発行日 2004年2月23日

編集 榎田美雄

〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1丁目1番地

(088)656-9308 E-mail:Kashida@ias.tokushima-u.ac.jp

<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/index.html>

発行 徳島大学総合科学部社会学研究室

印刷・製本 平成15年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナール
